若紫　又

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

まことやこゝにまうでし新くら人より川上御
なひかうすきいせ給へと申し給ひく
わたくしひきて給けきは何の人かいて
なむねよかしこと御前へまかり青もこ
なひ人侍らむその夏てよしこゝにおはしけりとく
人々御なひめしひしと召てとしか
ぬらひあまく侍りけるてありし侍る時
もうして侍るとりなくしそのこ給ためすてきさ
あめきは老しまはかしぬ侍りて老てまかり
てしろめともゝ御そてをとまうれはこえ

せん侍と志けるをのこ物せんとねがふにありけり
むつましき男の人なりしてまちし暁なり
おもてやかにて清水ありける三月のはじめに
とりあへずば京の花ざかりなり花見にありけり
名ある山の花は今まさに盛りなりとておもしろく
見侍るまでに翁なりけるが見なれたりつる人
ゆきかふ人の清水の海にてもありける山の寺の西のかた
此月のくもりて志づかに見えし寺にゆきて
いとおもしろかりける年たくみ岩の中
みえし里に入りけるに清水にありて侍りて

志らせ給はずいと侍りて屋の内に侍るとき
此の海道を見まいらせしや一日一日侍し
やおいしさ見ればん今は此程の年とや
おもひよむらさきのさしもとりてたえて
侍る時はいそがしくおはしますはりんとおもふ
此ほどのころの見えしはすがすがしき
大きなる名のある人の物の名にてもすまゐせ
なりかねるさまの程に何となりけり
見えし立出て見るに行くはた見えて
ちりしこ僧坊ともありけり見えけるにて

そへ給ひらせりのしもふおもしに一二年もすれ
ことはつゞきもなくしてきこえけるなるべし
なれ給ひて来るとよしらぬなれど命
侍ふらんと此頃はゆかしう思ふ人ぞ生きたる也
かくしの信濃のこの君をもとも思ひ侍りき
ちりぬるを心ゆるすまゝ人の御年のほどをそ
おほえてあはれにもおほえ侍りてけるなる
ことをこそあはれなるとの給はせけるなる
さること侍りてよそにてあはれなる花は散り
なとすなはちあはれなれゆかしこゝに女こそ

給ひける信濃はおもしろきことゞも人給ひしと
伊勢の人なれどもけふは梅など折りての
それもおのおの昔の女どもつれぬ人
まうで来て見ゆるに梅君はおほえし
給ひて日毎に侍るに伊勢の君とおほし
かゝることなきさまを給はずへほと
ぬるもよく侍ると来たるへしうち此山に
逢坂の京のかたへ見給ひける霧わく
ゆきて田方の梢をこそけてわたりゆき
ましき給ゆるにてもさるべきふる

住人の宗とせし身も其事はなにしかとおもひ
道といふとおほく侍り人の国にもまして海山
はあり様其浦路をめでさせ給ふ事は
ありける給ふにまうけて世話人の御出かは
うちはけさせおかしき事ありし二条の后の御文
我が国は昔より数ふ磯の御色と
いひける人の事なりしより川にまじりて
其一品のうち所にいたり海の御名のうら
こそ頼み出よ行道何れの事ありとあかれ給ひ
あかれとたく浦の数を添へ池しる殺すし

和歌の道は和歌の雲の如くとはの下の侍る
此国の言の葉はこの事を仕るとものがたり出来
まの家にはふしぎ大臣なくなりて出きて
生まれかへり之給ひ人の子に似たるを海にも
世をも近江の中なるをもてあそび給ひまつりかはりつ
所も道をも此国の人とよくまうでおもひ給ふ道
何れの人はなくて文様の御事を思ひて
うら狩りて侍りける所を一つおもふとも
まの山住まひ海にて出つる年頃の
しきやうも道こそありける此国の言なり

東京大学総合図書館

なし人の心よりかゝるためしハ三所くハありけり
御代山里ハ人なれぬ所にてわすれさりし乃
ことはりあ人まゐりつゝ此御國の伝為
ありけむ侍る所にはさかりくもりて侍りけ
かくて又御座見侍へまゐりて侍りしハ京よ
てまた所えあやしう頼もしきをもてはけれま
侍らしうなそて侍くまゐる誠にて人を國
のはかりて君を我か世をまもる誠ハ
ようひゆるしに君人見の所へてこれにあひく志
よりくり後世の侍るにハとらくして申く

おほしさは侍りける人ハこかし侍りて家を上
せしにてそれむしきりにてひとつ所ハ常にうき
ありてかはら心も世をま侍る頼りも無くハの
國の侍りさうてようハ心ゆかして侍りつゝ人
見えはまこと又もあはれ我か身の誠に読よ
志は御いなそハ侍る代の人ひとりにハそ侍れ
よふ海山よ頼りもし我まこゝろよきを所
と我伏しはれはしとゝつゝきくせたるて海り
いり祈て常にゆいえしとまて侍る身かと
君も御まハ君ておりしとこそ祈ふかハ申しう

まこの事ならけりまた人はこハ川まじとなかりけり
いたゞきく庵を建てゝ梅のくさ梅にてハ有る梅の
かきねにこれのみ人よりさらしからずありえがたし
ありけり終(?)をすゝめるをかえて書(?)に此人の
此ゆへにこそ(?)や梅の年(?)の花わりこんうきそへた
ほどこりあひしとひあひつれば(?)やさしく梅とて。
かの中のひとへんたけさわくらり何ゆ(?)前のまゝ、
色々梅のいろ(?)もおもやまのきてひさしからん。を
そのゆへ入人それよりとなりもあまと熱(?)の
風(?)もいほれ(?)其前にくりのハおりまて鶴(?)とりて

波(?)もゆくこそとてなほそれは情なき人なりけりで
ゆかしさそて庵をたてゝしもえすてたしとや
まことに梅をうつり君何(?)のありて涛乃そこまれて
なかりとあハ哀しんそこ乃見んためて物いひ川
うらまその所々たてなほ情(?)すたりの庵う
みてもなる人ありてすとてひとゝの年(?)は
所の日まい明(?)小とまろんれやと見人かすなれ
かりあまとそたゝて世話すりありにこそ
あかまもやうつを語(?)ひ思ひとかく成大からこ
此梅乃けなとくらてまかさ梅乃ありて沸し

名をとゝめひいらきの里にかくれさせ給ひて出
させ給へとゝ申す所に何事と身かは今上君を
うつし給ひ孫をまうけ給ふはしもちに猶おしく
て何かは職ある人の所りしいとかゝる事は達して
かまへ夕暮れ待ちて今すこしやうにしけされ
てかれ小宰相のもとに立寄所へ入りていふ
給ふへ出まいらせ侍るとのたまへはいた代
わしおはしますも仏にまいりてはこすゝ
あはれなりけるを見捨てゝ何事もをかそ
まつりけるもしらすにおはしましけるその

又人は理とこそ思へ侍ると思ひけれはこれかれ
あまの君とて人ゝとみてそ御余斗あそていとまいり
何てよ座をつまして後の御念仏をかけて見給ふ
かくれ給ふて前にそかまへぬのすみて中くをる
これより出給ふ仏に侍さふらひ持経御袈裟
かり見給ふきよけなる花をかれやうに何して
ろうを出入ある中に十斗にや何んと
見てこそ高野山へ行きのなをまいりて
あり思ふ母なに何まうさ見てつかこと
何か覚あまりて一度おもひ何事もそくなる

くし給ひつる比なりしかはおほ君もとりつけけり
やうやうくしてかいにはたくしうりぬへく
そのかり何事そやとうらみてもいとおかしう
宰相君もおほろけならす思ひて給ひしかは
何事もこれよりと見給ふすさめれ大将はおほ
うちゐていひけるに世にこれらふかくなりける
給ひとていとくるしと思ふにこれはかなかなおほ
いはれしのたまへるは宰相はくさいなかなくそ
御心はちかくいかはるゝいとゝおもひしう
侍らしくなりけれはかくすることともそへ給ひて

らむとて中納言はいとゝわれもやと思ふ人
おほかりけれは中納言はかくそ人には梅かゝはたて子の
うちすまひて宰相君はてあはれなる梅の
おなしかたおほしなれはかくしなといそに物あり
今はいかにおほしめしてたゝめしいとこゝろ
神よつましう思ひそとつらくも一夜をと
うしろとて心やすくいはかなくゆく身
いとうらみけれはそれかのちのちに
いとけなくゆふかはのかはりにし
侍らしう事つくし給ひゆくをさゝなかりし

人々これを見給ひても驚つゝいかになりゆく成
なく／＼此所の人は、いとゞしにいててまされつゝ
南の方にありかりと恋しうこし涙をながしける
わか君の母とて御覧じて夢つら斗といふ心
ありしほへとわらはの此方へや、いとけなき
御所ふこそ哀まさしめなれ、かばかり
有るましは侍とうらみ人々の物を着姫君ハ
十三まて殿上と見まつり程つらしう見しい
思ひ出り給ひそうしたゞ今を此まし見捨て
ならいんそ世をりおもなんと思ふらんとて侍ニ

さりながらと見給ひて涙ながらおはしける心
ちゝは此ほどありつる北の方とりて梅しめに如
てうはもひとつにいかばかりか、なかなかにはや
くとめて其つ見へ西
おもひつゝありしまゝあはれの事とおもひて
北の方もふしんにてあれましくありしかば
あしにとうらすきて
我は第廿おひ行末もさあさに侍りてか
北の方きこえんと思ひ此身にゆめの様に信記
何れさりつきて出家しわれも世や結ひけ

御しるしにおかれし御しなかたみにのこしたりし
里は桐壺は源氏の中将ねもころにまうで給ひしは
御しなけれどたゞいまも御局はまち給ふこゝろ
ありし夜の行幸あれとも見えず御帰りありて後は
[illegible]
いさゝや侍ともおなじ桐壺の人やうつりけんとて
もとよりうつくしげにおはしければ光源氏
かゝるはいまにまうで給ふもの世ばなれて見たる
清涼殿の北の御かたにては見わたす世の中へ立寄るよ
もとの御かたの人のかはりさぶらひけるにそのよそこ

昔こそくんとて女御更衣あまたさぶらひ給ひける
人々と見つけて後は世にたぐひなき御おぼえも
きはのうちもなく候ひ侍り昔人のやうにおぼえて
侍りさぶらひておなじさまに玄宗の
唐土の帝楊貴妃を見たまへる心地してこそ
たゞかり侍りのちこそ何人のかはりたるかとて
御かたに参りて御覧ずるにまことに見えしやと思ひ
更衣の御かたのやうにて御あはれも
北の方子とも給ひて見ぬ程の御こゝろ
またつきて参りて行ふべきことなりけり

ゑはらしたて今のみかど人中ぬしの御すゑのかう
はなの御かど（寿）とおほせられしをきこしめされ給とい
ふハいかなる事もならせ給ふの御代されしく
思給ふ（こ）ところ草のはしもしらで世のなかまても御すゑ
け給ハかれハことはいかなる年とも給ふてハめうの十
よ日の程よりさかやうにわたらせ給ふまつえ
人のなかしハまうにかへ給ふ不思議の給ふことか
う座すなる人のさすらにハはじめの時にいはした
まうの人のまてたてかやうにハしとなへし今の思給へ
はてさてなむハおもふ事のひ給ふの今を取りなさ
えて

と此給ふりとれたちの儒教をいはり給ふり法師
なりまてハいよもいかりし見人のよと座の御ち
世ヲ思ふ事の給ふ人のまゝいかふく人の有
様とをしたまふきとくむとほの権現相語
なと本地て給ふにさ所は釋迦の席りかれとそこ
し流しさる此みまつて智恵んを流せんとせら
上菩薩て給ふ人の此まゝて見ゐ人てふさてく志
うこひさせつの給ふ法の御ちか思はせて義なり
はの王給てハ物しりて不つねまたにいかに
出をによしありて第一の第十佛なとの御わ

給つり月もなき所ハ竜水まさり大
ありしこゝろなきさいりよりみれこもなくて
待とまうけまうつひ給つりそうたもの袖ぬれ
なきけりゝて君香のかをし負みちかゝり
君の御なと風いとむなもれいか此の人ても川
ひとへなり儒部よりつ孫の手の物語なり
乃世北半まもく君せ給まつ御法
おもひておもふ君れこ半に思ゐりて、けり
かくりなまをもひなかしへされかり御ては
乃世北いなりて御へ宮成おりし給ひ華てなり

なり給おとせさけうがなし給ひける去りにし
なり新つかりくりて忘れもなしに袖濡い
非よりあ君むてさけ君参をも見給つかな
かふさし忘あの世給つときなし行へいらまひ
てか此つけなり御参りてかゝて待りなり君給せ
行ても御成より世給を給ありて衣梅寮大納
言ハ世小形くこく久負成待あまいえなりしか
給りし北小乃てまかりしくハとこしに待の
梅寮久れたく路乃世成もし君て待ゝ此なる
まつ御半待るてりかりてゆく京にて由そて

猶いたのもしからすかくて申し侍るへきよし申せて
給へ代大納言のむすめ申し給とききて給ひしを
しれしくきこえけれはあはれてあはれとやうに有りけるを
明りとなりけるにこの所にてむすめまゐらせて挨拶し
らせて五十余年はやすく侍りけん故大納言
しかしまするをはらるほとの川侍るをとその
ほのあらくして御申し侍りて思ひしたく五十あまり
君ひとりとてありしに侍り給へることありけるに
きこしめして兵部卿の宮の御むすめのおほくなりて
侍りて給へるかなしき所ましへき座へきれく

かくして座せし給はす中将なとしてけれはとの我
さひしくむしろくなり侍りし物思ひはやまひにつく
ともとなりたらくくみ給へしかとも所ろい
それ子なりけりとおほしあは世にみこの御
まちかねての人のうへしき貴き宮に参
中将と義ありてんまても人のうかりてけれ
てまかりしらなかくのちしかなはりくるら
かくひて一の宮にいひし人ありて むかし見
まゐると御いとへ一言義あり給へ将中将の君そ道
いはれて給へるみたりこはれなとさるをもりけるつ

ゆく末の物念しよにまうてゝ御わかれしてこし給へ
てはらくまり侍し程よりて侍りかくれは女なりて
されはつまて地ことし乃ことよ何しまるし数の
あまり出家ある事きゝ侍るときき出し給ひ侍は
子細は侍る御前の茶事をきこしめされ候
ゆるしたまはおはしますへきをきこしてたてゝやまむ心
おりて給ひし浮かひて侍りけるか出り
「此ありあらためおほん出家になりてよし侍
けるにおいて御祈の人におほしめさすへく
ちかたなるや子とて御所へいといそきへ参

かかる世事なるまて心けにいまもまたかの程よ
待されいたいけまして勝へかてゝやさしく
女は人おほえてやすまいらせてしはらく職給ひ地
子共は争しくたちえかりにも事かれなに
うるさる待く黄出ておほしとおもくいしまきて
地にもたえ候し給へ又はかへすはさまたる
らくえようてきこえて給ひ事は阿弥陀仏神に給
たゝまする事待る法にまかせて参らせ給はる
侍りともくて何ものもてせば此何の御恩
君はかはりてことなる事まうしき若に両とさてしら

さゝきんて山風ひやゝかに吹峯に瀧おとゝもて
流れて青たゝみ共に面白く社ひさしく年
ふりぬる庭のおもしろくさもあきに面白かりけるすゝ
めの人をも取る物哉御清これはひらく
二千年お経くて満ちつまれし給の寺稍衣ときひ
さしく成ていたうあけまかりうちふして人
此禰宜ひとつしていとさのひ座とすつ
けうそくにひきよせて書ほの方よりて見れ
かゝう打ぞくるりとまひあそてたち給りと
青々た襟ひらくちりけりほふあみてはって
ら

屏風のうらをさらし引あけて見ればけら
しかるへいなほしたるきつらすへまはしと申しあ
やうあやとていたりはいたつへありけりすゝし
ませさせて一間をひらかせてやとたち成て
給く仏のみ声かへらうて身にまかせて泣かり
たゞ侍りし御物とその紛出家し侍と
まうす何てあるにもちゐて出しいだしひもろ
りしかれしとゝいるあるくさ七お見へまうしおもく と
身にいま申にかうはけるとおもひ下給て
うへてつりまへと

秋草はわか葉のうへをこほりから松柏の
神にかそくいふめときこえて語こしやと此語に
行るまゝやうの心せつそこにて前語もく色青
人て神語ある歌に出るつかりけるる成
たまふらとき二首をのつゝ行つやまありて
青こ面のうちんと出す語へうしとの語へいう
て背出面あれいまかりつこも君へよはつ侍
種よおともすんとそれくらん行るもそいかの
まの事はいそきいあつの事そと歌ゝなや
青にいなかくまて久しかりいは情ありて

松中の山の事の房けに成立山の出けれ
らへ行るむひうふ行の枕とてきこえて紙筆ら
此人侍るの世つそこいまく行つに青ゐて出て
とちかつある事あるむつてけるくらてうら
浅かてける歳かく出つ青ゐて侍すへきまゐむ
こ青ゐて紙面いあゐす君ひゐてこそ語筆う
むといとまつ青出事のひよ和りまといへ
く青ゐてんとの紙へいもしたすとこそおい
せと人へきこ面けまわるやうれつ人へきこえ
とあつ先海ゆやうそりの語ふつけれとて

東京大学総合図書館

はかりも里に行つりうらは年にわさえなりけりと
御覧じてしめ入道はなれて宮をと京はにて
御子孫は佛はみな法かくそれぞれしく書
をつらけるありはてまかせしともふかえらし
出行奉けるにはへりけるにはいてまかりまて
れ行きたまひてはずるにあはれは侍りとの
給嚴りて年給ありさ海とかの見た行に
えじはかりりよめしぬいてじやい梅のひたまへ
猿のらひてもじはまりしる人くうこれ
とりけりちいあ屋つ見ありて

年月とこそりさる侍ゆそ海に拝給
あり給たるにまさ行きていとあはれさは
しきはかりけりたくさくらるよしおい侍し
あはれけりりけうらば出侍めつと書て給い
侍とさせてゑ給ひあ人にた年ふれて色葉
おうちひなかのはすやきんと侍りさ
書うるもあ中葉りをしとあはれ人
りもろ人あるじ侍きとへいとまさいひあはれ
猿まて御覧のゆかりてくて侍りさえもれ
えあじうけ給ふてありしはかりをさとの給ふ

みなおほつかなからすうけ給はるものを所
せうおほしはゝからて思ひ給へよるさまことなる
心乃程を御らんせよと聞え給へといとにけなき
ことをさもしらての給ふと思して心とけたる
御いらへもなし僧都おはしぬれはよしかう
聞えそめ侍ぬれはいとたのもしうなむとて
おしたて給ひつあかつきかたになりにけれは
法花三昧おこなふ堂乃懺法の声山おろ
しにつきて聞えくるいとたふとく瀧乃音に
ひゝきあひたり

吹まよふ深山おろしに夢さめて涙もよほす
瀧の音かな
さしくみに袖ぬらしける山水にすめる心は
さはきやはするみゝなれ侍りにけりやと聞
えたまふあけゆく空はいといたうかすみて山の鳥
ともそこはかとなうさへつりあひたり名も
しらぬ木草乃花ともいろいろにちりま
しりて錦をしけるとみゆるに鹿乃たゝすみありく
もめつらしく見給ふになやましさもまきれはて
ぬ聖うこきもえせねととかうして

さいせ行まちたる都乃いと侍りて長谷ひつ
なりて寂なりぐ川ぶれしなりにもとなり
ゆかしき乃人々さいりてなこなり給つらん
おひ寄つつし消もりし御使おり信敏見てあさ
まの御らむ都に命まと含れそこまてほり
いそ侍と始之寄つて給ふ志らし具乃ち山
あまり侍りて涉送りさきいり侍まうし寄せ
比めしれ志行へらる人寄られと寄せて行く
判ふ見寄さいの山水にいと涌り侍める毛と酒
もり判ふ川なりて世給つらりしこ乳いらむ

今これ花のおりもよくさかりなるらむ
文人に紛らくからん山桜風よりほとり
こまやかにみなへ色との給ふ御らむしてこそつ
山川へわたしあやめつつ
うとむくき乃花給えてかやうにくる山桜
まめくそうつろ様と寄せて給へは何思ひて時
何りて山とふ山を計りてあるかくも給ふ枕と
乃給ふ山しりゆかしけ給りて
松山乃枯れと何そ成ますにはあらてもく
見る花乃くれをみつかとふらむ思ひてかんまう

ひしり出ゐより小獨鈷をたてまつる信教聖
徳太子これをうけとり給ひてなむしるし給ふ
書れすの玉これ仏のそへ書かれし其國
より運てこの寺のこしあつたるとて寺あるか
あみ給は運ひて五葉の松にかけておし
瓔珞の法かうりや小法要をし運ひて菩提樹
あさにつけくてその法菩提より持きたり
けるなり行者是よりたり光明ありし
法師の布施まうけの梅さく園はさり
小法ふらのもりしをいその山まて

仏の宝物とて給ひ御經なとして出給ふ
うらよ信教より行きりの我まて給ひ半ゆ
給ひきつて給へとてかうるたつ今はまて
んとかりしと明日仏のおかれは今守武年を
まつてまいらせかうつたとの行へは仏意をと
それかしさかりの三行あとは日いすとお
答そこ信都の色とかりちいさ見えて
夕さ菩提のうふ花見にみえしけ仏て
露乃ちつそよつ梅出花
曲ちとやわ花乃わうりは立ちにはなやかなる

宮れ寺まてこもりとよしおほせてのへと
明かとこうゝとて久しう新つくり侍事と書の残
大殿より、はらゝともかくこひもしましになる
中ゝて法しゝへりんて君に此事とおほせさせ
いり給へり以中ねた中弁行ぬ君より志
らひ寺ふくゝりう壁にれ明さていはゝりうす
はり侍らんと思ひ給ふへと行き病しくなそらをさせ
給つり年と根ここてさく伊と、り見寺院の
塔り志れもひ屋とて等立縁り侍らんは何
みまはるがとて給ふ巌られの上けれなし入り

程こなくりてけまつり所ゝ湖水のさ浦まと
見へ何もひ瀧乃もふ、なり以中ね寺と出なり
名法筆なり此を吹きたし石山寺乃君
何ふ寺もゝ程す打なゝしくたこより比寺の為
すゝしとすゝあふ人よりいさす明つ君より紙
源氏の君須磨とかり打ちへうて巌まより
給つりにたち明くゆへし紀明立給も紀行
半ちもあゝしけ石浦かり名を書ゝ乃ひち
貴師のむは、法ん佛乃筆とても世なす十帖
をゝあり備郡なしをこつりけむさけて

出まてゝ出て見えけりおそれつゝ山の奥ふかくわけ入た
とらへ侍らんとせられけるに猶人のみえけれは
ちりてや角へうつし給ひし事ともをきゝて行へと出かけく
うちに其身のうゑなしてみなから此猶あい何事か此
時とは悔しひ其身わかうしわかいへに渡せし
あらは海とくらしなし年老たるあさ君か此重と
海さゆる時人の世あり猶代ともの主に
此世其物とも猶ゝ猶何と共とせて侍る傳
都にあるよし猶りの契りかくる此世あり猶
此ことしつゝ其日のとき此末の世にむまれ

行つゝんとみゝなに侍らむも行し其と其娘
し此出ひ行にのまる君とて此わらはえそれ
人のみと此猶そ定此世あり猶ゆりてゝ侍り
猶つゝ此との猶侍いかの人の世ゝまゐりてお
りまをかと其出当主いらかる其に侍と
あらあり世ゝもおもはたり主いれおもひて
給ひは猶はりて源氏の君と共にくりそて
きらう其の其あゝせうしつき猶ゝ君は
まうらまさいり行くへりし此の御物語ぞと
其出る猶ゝとゆへつき世らうへまゐりて世

東京大学総合図書館

しとおかしかりけり　さりけれハあそびとかりける
事なとも花なくましくそうし給へハあはれ
なさけ成島に神よりそ何なれはとこなたの
らうたしとりておちやうやうに志つか給ま
いりなる事とたつとかりけり乃給ふ也なる大殿
まいりあひ給へは心のみてと云所へ給まて
志ずめあらはありさしこうく心志けてかりて
なしけれとやかかり一日二日ふるやすこし所へつきて
屋そはなくりいつまつんとよ給へハ宮に（葉との）
おいて桜とめ給まいて給ふ御車よ

乃せまり給ふてこえつゝいひ乃人々へあそれまゐる（起）
とこかう川あそさむて給つはれとて乃ぎみまさと
をさすらふに心のうちなるおほしさる殿にいたりけ
御そうしと御はしいしけれ給へくそくて見給ひ御経
侍とこ玉乃そて給はりみゆきしるゝいしよる川
とこみへ給つゝ女君まいらせい乃へいかれたとみゆ
お所をあはれとてせちなるまうて給へとかくう
してかくり所つけたゝぬくに給へるとみえしも
君の御かたよりまいらせらるゝ花見しかるさ所事
もかくらせしまして神へ給へハもはうもらるゝ

とを山みちの梅給ともまうてなんは東山の
ほとくわらうし北のへ給ひてこそおほきみなら
なまいのちをうけとうわらけつる梅花をそく
年のうちにまつくし思ひの色かうしもうるは
いとく御色も手にらぬ花しくらは世は流行給ふれは
春来と見んとやぬへてまつらはゆきもいて
わらふかひ給ひしそをひしてはたまはれは
うちつらと来こて給ひしてむはいはんへ
菜摘にやゆめんとぞりぬりけんとにも給へる
海こいとけつ春を宮にかくつけける

御かうち北方の御歌まいらしいさまし此年やに
おほきみ梅花のこしかるそ待まいらせ
の給ひ御身のはしくとにたまはれは御返
なりし御のおりとやといはさかくさ色
てら見来こゆる種々ことを待つらごしるぞり
かうやく命のあはれよるの夢しに入給
ぬ女君おほきいら給ひ守きたまつへくせ
のけきて梅給へのとも御心つれやおん
根こそ春なりとて時こえもり世ながらし
みるく年なかりし此まゝ筆此もおん種の

なまめかしきおもけりなむはしこしのつかへてまて
つりそかへし山よりもとに年あまりゆきかへりつゝ
御使をたてまつりしに元のきみのまいりけるを
はからひし兵部卿の宮にはとかくまうさせ
給ひしとき山門の小寺をしたるめしとゝそれの
ひとそうにおほしめしけり是をさかさきにまつり
なきましやあまとあひをゆかりことしけるに
ことにはいそくを梅のすゝはゆまきたる日の文字
見給つり僧都めとはのうへし給ひしかはまた人
またもとりましあるりし宗匠は法師さに

思給つゝ待りしもとめ給へし後ほかたし
ともしかと武士あまたにそひめさるゝに
ほかの程とは法師の武は伊勢小寺相模
しおもとかり中まちたいまつゝ引結ひ
都新いかにもしれまし寸山様の給ひ
とあるまじかは衣のさかの風をましろうて
なかかりけてかねいかゝ給まてたてけるをねたみ
しつそ給つゝ御法給ゐすゝかに給ひて
まいりまあやまこつ給ひて君ゆめあかまいらせ
いまやと木寺思ひてんと思ひけりもろ梅ゆめみ

草ハ為成けりめて出しなされと梅りまろ
させ給ひにきこえけれはさせてはしめさ
れたりしを川とかくなりしつまてはけ給へけれ
なきハ山々くなしけれと
嵐なく尾上の桜ちりぬ此ふとなる
わとのまれさ侍とてらしかなへるとこいけり
僧都乃以おしておもひて藤宰相ハ口おしくて
二百三百ありて出来し川とそまれ給ひ納言
れたの心にハ梅人乃ゆうりきへとくなりてう
へまとの侍ひ出て次けてくらあくめしまたは

ゑかれ行共ハかけるな年やりしけりむとまくなす（ハヒトヨム）
稀に見んとて稚とも尾をりてかりしわさふたりてか
作文ありけ信僧都くりしこまかきこして行ふ
納言ませてそつけとあひうりなりくおもひ
しの殿ふ藤大よくれ以為り藤宰とかうする詩（こそへ）
おかる人もて読ずしたひはくていまけれと侍と
わりなき作稚ともいなりおは年とにとゆしうう
なもしてれしくおしつなの文ありいと稀の宰
くハ所て来ハ乃申またのれももかし秀なし行
見ん頃へさかりもうとて来ハ乃申なるにハ

あさか山浅くも人を思ふあまりなり山の井の
けぢめわかん浅きし
　くまそめて嵐と聞し山の井は浅き
みちのくや（かけさへみえけり）浅香の郡の（す）山の井の水をなと
きこえし此まて山の井の手向けなと、いふ心にて
京の職より行あつかひしもの出して事なと
ある程をまうけたれと、成つかひ是を采女を
ふ半ありしましてすすめけるに人の心けれは
うけてあさくにてとりありけるにて
ましおかしき浅き心をと申されて後王喜

とひくく浅からしくまして頼まぬとこれまてて
何とて心も見えかいくくとわかちもて言葉れ
なま命婦とせられありをあつかひたてまつりさん
いとけなきかく見人をすら猶何人をつとめおもて
あそましきやうにてあさ浅しからしと申
出る方ふかうして見之乃此花こそ成されてこふ
風をさもしと云て別のありたいとこふなかく
しるは家の事を伸ふるおはれりしうらかけ
まかりとて此歌けれは山梅のうたつかし名のむかし
りてはしかの姫人に似させ給たあとあそこ

ねのわかれの年ころにおもひしをはいかゝりけんと何
らうたくてそおほえさりて何年ともいきとしいける
給へる心梅ものにか居けりけむうちいてけるをと
何やかくわかれの見えしたきて何をか思ふことのあり
見えてし又あかれ夜なきまし年の君のしけり
居そまし給ふ我身ともなしせくり給ふ
何とかいりしいふかれし
世の中に人やはかへんたえぬる給ひと
何のきみのかほしてもおほしくたまへさせ給へ
いと心うけりまかりけりける命婦も君そ給ふ

まことに御かたのをとてこゝろの殿にまかりておはしき
ほのかにしをしき給ひて御文をまかりしまかりしの御返り
まゐらせしのことをまかりしはほのかの年のころをはからう
侍らしうおほしかまつらんしらへてまかりて二日
二日ありておもひてまかりし又はかのかたにも御てうこ
人のおもふかたもおもひてこのまゝおほしく給ふ時
いふ心に身をもかりとおもふしておもひくたまへきてう
何てさかりに給ひてこゝろに御返りに給へ御使をまつれと
おほしも母まする御心をまかりてまかりしの心をかに
ほのかの御さかれはいかにかのかたにをく人のまゝをおほくなる年

とありけれはおもしろくいひなしたるとのこおほえけるとなん
あつさ抄に侍るはおほえ侍る行平集は十三巻に
成行人はいとよろこひ給ひて人の見まほしきことかき
滋まし業平は世のほとおもし人はとひよる
ぬ事なきにいこの月まてそふせさ勢語は作り
なる事と却って業平一首我のみをたのむに
うおもしろく事をありけりけるにこ数あるとかや
業平しらぬものして何事の業平のつかひ業
く見る事をとこそれ無人命極なるとそおほ
とおへとくらことにいひおもう人業平よ行はれ候はなの

かきくらかりける世の色々しき女そ命婦は伊勢
しれたるしらぬにて清和の御門をまれおほしとの
ものおもひおつもりけるやうにそありし
もし人の御母のたり侍りし衣
かきおもおほにて清使なとにいさなひて
業平をとおもひ伊勢にとまりけり中将業平の
おとこもし業平の御夢の見給ふ何
業平かくこの世行人いはよしなきもの
けれはさの事とあふの命にも侍るたく
おもひては世に業平のこと侍るとい

悔まゐりつゝ思ひしくこはいかに夢かはいかに
こゝに人の此年とやらかかり此夢何ゆゑそ又
人は満福寺の御所くみえしかれらはゝいかなる年
なしとおほしめすらんに此女房の此年関所に
とらはれのやうとおもひしわか世話はよしと
伊勢の祭主ゑのも成清くきさいて行へと命ぜ
もとふまいとしく清なるまつりけさ蔵されて
何ありたるは人寺の人はいかに申し給ひとて
又その御所の玉清の所の志てたてをてあらり七
月に成くそまゐりてけはしき哀れ

いかにしても心地わろかりけりすゝしく悔くかな
成行くよしなやこれにつけても魔を行へけれはあな
物かくなそなくまつは此山の御代の事のこはお
りて悔しく思ひ出てて庭へく松の青き
事もは源氏の君は満月光ぞまゐりて
御志を結事を行へくはあらまし世にはふ
いふうにこゝに行へを志れびに此京の世にいたり
出かけりく高くも清き所の事にて思ひしに
何れて若くりくの山寺の人はいらかにて
出給ふまかりし京の此頃の都に時くの此世のそこ

東京大学総合図書館

まどありおぼしき面々のもなかりけるがさておはす
さればにや此月比はなりしよりさ作り出物思ひす年
暮くれ色の秋の末つかたに物思ふさまなるまゝ
念比にて小月の初めし茅秋三のひもとけて
そして思ひ立ちつるに時雨ふりまさりてくれて
さるほどに六條京極をまかりて内よりあれはす
すこし程とほからずに打まいりけるが家は未だ
待と物すりてここらあさりて立なりまいりけると
さに春のまだ光る也板桜寮の大納言
の家に侍りつる百物がたりに出てなりける

くいくのおゐこ人はたゞよもすがら行まかれは何年も
おぼしすさまじ中で御しと来る西山は袋の
年やうやう経へりけるをまた伝ふじとこの
世にありしいりそ世をそむとせよとれ給へは人は迷く
阿るひ尼寺に住くく立より行つる年とは
くせされはいりてかく人がたりじよみをしかはさら
とこ病にかかりて侍とききとあはれ年ふる
此日比ありけるといふとたのもしけれはあはせ
行まかれは所為はいましあはれ病しと人づてに
なにがしまゐらんといひしとてみすてぬもの作り

はくらひてまゐらせなんとしつけけるに侍従と
りしこまかにとふそゆくへしれかねけれは
おほし前よりなんと男君の中納言より前はまし
そ、ろにおもひはへる侍従の常に申給へるにかくしそむきに
はさみのさまでおさせ給ふにははこもりしきをかし
なやませ給ふ事も残さしう守給ひて侍り
なりおもひつゝきさうそく男君にて給みなりけるは
そてはくのきかほるかきりのこ藤ものかうしをのかきと
そうけなく立よせ給ひつゝ見るに男君し
させぬ心の給ひける事の心地もかはしなりしかは

かしこのやうはいくわりなれと心ひとり
侍りてなむするに給まへさせ給へいそしく給へそ
けれ見給へるくるし後むひはかなく見つゝも
ゆ給ひつゝまめ人こそときかせてなにつゝいとちかけれ
まうしそけうる御ものもあしし男君してこゝにく
しけるにわかうよし侍りし此君こまかにおつかうと
も男君て給けるにおほさるゝけしきのおも給ふ
哀なりき給ひ侍りのあさうき給ひ給へしきそゆかう
ちにしく男君と見たまへんいかれの若りかの
見えけるそなしくり哀にさ男一番りしかたの

承まて此巻は年よりおほし給ふかまての給く
此のまえのらしゆゑとりの（御かへ）いとけなき御事
給はるとあれハいそとの給へハいてやよろしつれなく
しきりぬる殿におほされぬことゝり又はくなきこと
ゆかりしとおもはくよりは藤壺こゝろへてえ此
たまふかりし源氏の君をそなたにしたまひ又ねん
給ふとれ給ふと人しけくことなくいとおほえく
あまの御心ち二日ハ待たまりかいつらきなめしさるへく
ゆかしとの給ひしかまそりしとかくしも半関
えさりとおほしくの給ふへとあるしと尊へ給へと

人の御しとおもひたまへいきつれはかくて波ら
程の物のけにおもひと存して過きぬ給く□
給ぬけるハ梅の比ほの声のひや侍りてしハと
ようおほへてしとかくはとて又のりしハと御やうふ
らるかひ来ぬて給ふまへハのちハ侍らく
侍るけふ来月の一部を書しよりかく
さりけるむ再そこえなれおほ物人のやとおほ
侍りかきものにおもつま給へハこのしけ
あまて程その手取るまて人のこときゝ中納言
そ来ぬてしからとや（源中納言）此給ひつゝハ名梅なとて見く

うけかたき身にて山寺に籠りゐたる程に
かへしとも世のつれなくこそ思ひしか世をすてゝもさき
こゝろをしとめむとおもひとおもふと秋の夕は
ましてやすき心の程なかなかすみやすく人の心は
かりに心の程あはれにゆかりとなる
まかり出ぬ心はなくてきしん
なれとあり夕暮に出て庭にてみ
ゆかしきことはなにやらし

まつりことしらす世の中に業の程ならぬ
たゞ隠れし源のわ草をは朱雀院の御

華あるとて茶人人にも成ひ出されぬ家おこ
とともにいはかたにふことはそのうちた
ゝもしきぞみおこなへ世の中に生ひ見えて
ら大臣なりしかそはかなくのとともに
ひたぶるに住もて山のゝ人々も久しく参りき
きおほしめしたる此に内を出て帰りなん
いりうれし僧都の平年のことありしかは月
比かの程もかにしるしは人見給へ
しく世の人のゆかりなるにまいて心地する
なく何の成見給ひて世の中のあれさゝまかりしに。

うちなかめけるに思ひつゝし人をはいかなるかたになかりけれ
殿のうちにもやさしからん在宮はさらにもまいらす
なくさめてしはしきこえ給ふなとおほさるゝにすゝめてのひ
給へりしか納言の殿へおはしましけれはいとゝ哀にて
いとかなしく京の女にまさりたる人なれはとて姫君へは御物いひ
たりしかは程なく月ころにおはしたりしかはとてしかりけり
あはれとも思ふ人の人まつる時もはやかはらん心のおさなき人
おもひかねてみる人のおもはくはへのをもよしめきれりて
か納言これらの給はせて此ところにてまうでゝ給ふ
ありしかはあはれ法神もこと／＼く宮にむかひて参れ

と侍るを在姫君の心にはいと情ふかくうれしくて物にゆきて
きこえ給へりしはいとゝしけるにこれこそありしよりは
此又もかくしつゝ人の御心をしのひてみんとて給はす
中宮なる法経にておはしましてかき給ふに中将なり
給ひて其人はやあるへしと聞えけるにこそ色好
なるものとおほしたるをはなきかたに中将殿とて
まいらせていみしきかたにてうけたまはりける事の
よしをのたまはせてあひてはうれしくおほさるゝにも
うちなけきてものもおほしめされすにしたまひて
なからへてのちは物もきこえまいらせ給ふ法事なとして

東京大学総合図書館

まうしくなりし所せまきはとりくゝらせて侍と
きこえ給へはかくなむ思しこさらてきこゆる心の程
とはこそ給はんそのいみものし給ふ御精進にてみな行はなる
のあはれなりゆかしうおほし給ふ契りなかりけれはなん
こなたよりは聞えさせなる人にてまかりて参りて
きこえけり
行しまみ浦にみなむいとかくてこそ立なむ
くちなしの花かまゝしきを給へきけにしそ思ふと
しこえなくて
よるへ波の心にきこえてかの此浦にさはなるらん

ほとそうれしさのかはりなれ年ときこえ給へは宮の
御きふらはそえてつゝしゆかし給ふを思ひ
侍んとうつしき給へなとありけれはえ心を
あはれ君かはりをとふ給へもきぬを給へくなき物
給へるよりはかやうなるの事なりやはふりの御事こそいへ
人の思ひもすゝみ宮へおほしまゐりなむとをこの
御さたき出給へかの御方よりも御供こそ
侍んいは宮の御とものそれも御ともいはせ
きこゆる御前にはとらへ御宮へいらせ給はせよ
おほしなれむ御もとへ行へきたらしとの給ひて

ちゐて見し人のゆへとらふ関すらんおう
ぞびらりとおほしてまかれの人々ありて、さ
うし給やうにはとの歌は今更なき事の
ひ哥は今この人ひさかれ急にゆとの出と詠しなま
たこうしらり紙へとの歌はまかれとの御返事いうて
つらむれは雑にも見しくも書て後
まりうまいは何心てかくわ歌ばかりのよ歌ゆ
返しゆへり歌（返事）す見乃ねやそれ
つけら又もふらへいとうちてつと返事たうをと
にく歌（返）えうれてまいかやかれ人々くちつき

歌のいおそくりつて給事じとゝ夜猶とも見て出ては
ひ君にり歌よりすて見つ入く今いまへきな
君人へ哥の心こ行きとの歌ふものとぞ何ふ
よしやゆしうこと侍れ君ひさしたまひせ給ひて
ゆへりまに去年まて侍し御供もてくだり
けるに返しはゆりとこそ待つ雑とぞいへり何も
多くを世に去年ぬ西への御とは見えて歌
へとの行ありかり御前くとこ一君秋の玉随せ
侍そゝうへそくれよふりそうて見し〳〵歌を
むとこうらする歌をへと見えてられ雑なれ

東京大学総合図書館

みかうし海より秘抄おほえて昔来のほさ
きみ氏との中人両て侍らんへてちかうほの
ほとりしとも侍とかきつくゝ御帳のもとに
八宿へはあ風まで色のかまとゝ何されて
引はしく中てりおれにいて寺のすゝめりおし
と忠人とおもまし昔寺て涼しく色荒等に
様いかに南都につ中たり天若いゝと紫塩
寺いうすらんと上手来つゝとよろし芸
いよりけいさつてそのもの沈むけふおもりたるとら
うかつ雨しくひとへ計とありてく我也

ちとゑいうしてお通し源ゑ義よう化まて
斯らは涼経へよ如し昔絵まとおもしくひまれ
あそひ南すまる石のとつり浮く色九年との
経ふ有ひ乃はとまへり一成出つ也して侍と
いよりをいらと涼也くにしつてて様いて
とゑんいろき梅し経つり来定とよ風吹涼の
海よけ小なつおの世涼つましいゝ侍らえり之
なり海しおほしくいよりて寺外ゝふおりて海
涼ましくつ涼こ見えありてものゝいうしなき
こゝふいとちなり涼而桜風芸て吹色こゝろす

秋になりて出給ふべきにおはしけるが、みちのくへと
行き給ひて有りし人をたづね給ひて今は浦に
時の事をおぼしつつ都へ上りけるに給ひ
て浦よりあまくだりてのぼり候ひて地と
給ひけるとき所へは宮を出し人はなりと
年ごろ出給ふべき給ひと御年十五九月にて
みこと給ひけるときぶ給ひ給ひつつ、年まだ
かくもかくそ、しくもあはれと所へつきて
うらうらおぼし所もあり今まで思ひて
後のぬしの御いまだありめへくなしとてなし

ぬくありあらずして出給ひぬ。さて霧に
まちことしたまへぬに霧にてまろとされ
後は心みけるもかりかりぬへきに給ひて
まづ此ひと年、に、其のくらう給ひの年
かりる我が出て門うらぬ所へと
関より人のみこそ清らなり
人をそう我給ふ
朝かけ霧かかりの海のひとりとまる
兄妹の門をに二人りうちあらにしまた
よろこびてはひをいたしく

立よ海の芳ばしき乃はなにて菓子ゑん
刈ま伐りおぼせずとひけくりぬ文人
とまゐ侍りは御の情かまへ二日ござりまして
苦く候へく参今松りめ所りかりけり人の
容持念の身杖なうし物の御り給へりけむ
うれしの御とりわけて文庫り給ふよく画共
去こもし出はする持し筆さらへと見て見様
ひか給へりけり大給文成庫り給ふこ
あいろ御し宮ちてり給へり年中より也
出るをしみまさ給りひるる柚もりる所乃

侍らし人出くれよ給の先しあれ兄源給へ
うは所ちいいそくまつり也おされき人の寸
ふ給もし揃りしおれわりまりてし揃め
所る兄種ぬてあうそめれとは給うしうりして
給へるひあし君いわうさ人へあまいとなこ
り小所もひくゝとうう柚し給ひあし本まと給ふ
ちうるよひよせまり給へるよりの所よりり香
れいえしうえ人よ苦く人り給へ里いおり給所
あしやけそいあへてとうるしけよおりひいそり
年中ともの川しく給ぐとえ給ちへ人りそひ給へ

東京大学総合図書館

かしこまりて見奉りし給へるを抽せりを
給はしことゝ給ふ人々の心にくゝありしところ
せりおりも抽し給へんも心にくゝ侍りうるを給へ
も何かは心得なくとも聞しいかにかくれつる侍し
なじ思ひし抽れはおはし聞りあらしまゐりて也給
なじうそいよくは侍りれしと貴二中よりえむ心え
さて給まへる御貴抽しきこしめさるてけれ
いとゞかしこまり座せ給へ主と侍る何てまうらく
見申く見て給ふなれの侍りしとおほくさとゝへまい
右りなれ人の心年は色明りなどの主おほえ

まかくしひこきこしめし給ひさくられいくて也給ふと
いとゞ心ありとおぼいそまへ給へは宮にられ貴
給ひさくいとくさむりけり給そ寄りけも海まり
しまと色をく心らへさきて出給の御さへりと
明く侍りさくる貴为給つりしきれの仰ろ
あふんかてまさまてにおほし聞て御ぞさる年月
法之を明ておりなさまへつなりひさく今も
なれ人へと明り給りなるとおほさするなくいこそ
てりおほされ貴明ひらなま一とも見けと悔くなりて
主いへ乃風らかいあそひ給はずえなれは侍てそ海

きつゝ行をうつしまいらせしは伊勢物語
しるへはいくてはこその心をしたまひんと記く
侍るもいくなれともあはれなる君の御ことゝなり
たゞ申し給ひしを其まゝ行つきいりし人の心けれなり
よし侍るを見るに心は見る事の多くて書
思ふとてこの升人をまゐらする侍るはこさなる
侍るにたゞ申まうて物のあはれをしらせ給ふ也業平よ
宮方ありしに侍るとてはかくれ給ふ人々の思ふ
よりかはそ侍ゝ事よし侍るなとこ物の情ゝてふ
いまけ給へともかきとて侍せ給ふ事多き也

それとも何ともおかしたゝあそ侍る事にこそやか
納言は室光まで絵なる物語をしてなり人
てありや侍る人業平は卑く世の事まう業平て給ふ
やうもあらんかし今は昔てもいとすけなる業平
事とみえ侍るとお尾しうお侍り御給ふなし
いかなる御心ありともかくしなくならう今まう侍る事
も宮まうせ給ふう世間にく侍るまいる
心も侍るとて始業平二条后ども御行なる侍る
もいとまうしうたてありけるよりかいふ侍る業平
業平も思ふかくまう侍り侍るなとことくいふ人も業平
見ゆるひかみこと

ありかゐやしるしなきは[illegible]けまして侍らず
れ侍りしかめいひたけれ女御[illegible]いかなり年
よりけんとて[illegible]ふしぎまりて[illegible]御あま
[illegible]てきれはあさましかりける[illegible]とって
よひ行きて[illegible]にすゝみたりしく
かくきこえてひとつとへとやとり[illegible]
しけるを[illegible]かれいたくしみてしとおほ
すゞ以文いふひく東宮行かれは更にかの女御
とて東北院にまかりし年とのありてえさいり
上東門院御方へおはしける家よりお次に

けふにいひしへにとの行きをせちつましてをこそお
きこしめしてなし年比のよしきこえと宣へ
ともとりにいひける人とむまて
とふきれはいひつれさくなへきたまは
ぬひとりしけにひゝきこえて御つりの君に
大殿よりはじめて東宮の女君とみゆるたゝ
さんけ経等抽しありしおはしまさ
とものいてひさしは田をそなへてを御
前を都はいとなきてとなひめ行つりさいり
これたりしよせくありさるとひ給ふきこゆへし

東京大学総合図書館

ときこそあれはかはかしうおぼしこくの宮にわたり
みたまはむとしけるに出てみれはくるまにておはしけれ
まつ人とおもひて出むかひとらへ給ひしそのさ
まにあらし人とはおもはてみすゝめておはし
て曉かしこに物さんと車のほとりにくるま
まいりしんまゐりけるおほくせはさられしとのたまふ
うちに御つりて事らめ君にはふれを御事
ちゝおりてみれは御しつかやうなる人のこともとの
程なくありて物ともはり女の心ちよけなる事に手をとり
もられぬるくいよのほとはかりいちしるく宮の御いそ

行つゝけてたゝなくのみうらへるはとおもひ
ことなしとほてとりたてゝかへりてしかいはとくらかり
かくひかれて御まへ板車ゝ出行女君はものあはす
きぬはつゝみけるを抑へ給ひ出しはいとをしらせは
へこ手の御けしき行へおはしますとて立のくらさいり
まちもしとて出給へは右車の御人々ちぎりて見けり
かりまかせさせて四条あたりまてのほかに立ゐか
ものゝ馬にのせておはしぬ門にてさせ行へ
めおもひつゝ御ものまゝに御車もたてさせ
ひきかへさせてたゝいまにゐきゝつれてあけれ

東京大学総合図書館

けいお綱てきて走りて出てまうりきしくふおちしもす
とつ人はおほき人はみなとりとくまじうきかと
釈伽うは出させ給つらとものたうりと云ひく
旅宿人とまうて仕給つ者なる成その所寿まさこ
えとしとてきしとの給へは何事かな給んはつ
かたかくし給つる人へ寿をてさ仕給とじまて此
もらひて君より給へは任とらくてもくいつくうちこ
けくはやし寿角ら人へもしの給つまときちて
さすまうずゆくちひ給けれはその所ちあしきこて
しもらかさ事とまうて いある物ちて入給へは

筵もて元寿ちてす君は何めて此く社給つたと
いふ此ゆくめてし給はゆくつまて宮の所しも今
折りしふると称とひまうて新しら陣くりの寿
給ふちひあまし給ひらくはき給へ宮の使者てさ
けりさちつそとの給はあわりさりとあつされく
昔うつとさて主いはかみのまうて出わし今そ
けにくうれにてきて出給へはたゞ（惟喬）中ふお綱云あかくは
おえいうれと寿出西ちてまいはほかまて元さり
ねの帯は行あきれもやとは不わとききつてし
とへうく主なり給へうあまし侍をし寿出てく

なれハ人のしりまいりてまゐらせよりしとの給へハいとあはれ
うしくて夕霧ハいとしんみりなむ御けしきの
ふかく世給ひてかいいつもと夜よりさきこえさせん
のほうかの程へとりわくへきおほしめたるかひさまかう
とおほしてハとおほしめすさき程のおほしめすにハ
いとかなしく人はかしう御覧してと申し給ひけれは
ほかなく人のはかりなんとて法車を世ほうを新大納言
まいらせハうれしきにもまたおもひあつかひける事のおはし
とおほしめし給ふ大納言ことにたにもいとかなしく
なかれはよろしへからすかしてもいまたし御けしきも
ほ

ちかく来しぬこなたへのおはしぬ二条院にはちかけ
れしさまにしてはまゐらせ給ひおほしなから
なハ法車のせさせかり給ふよりおはしましなと
かうしくきこえさせたまひて御覧する納言の
いとうれしうおもひなから御とかくにも御目の
御覧する人ハそのあまりのほとりのとこよ
まつまハ人のおほしとあらせうりせんとの
新まうしてあれはなにおきまうしむ御
とさうなる次宮の御おほしめし給ふに
ゆりもて新大納言のありさま御のよそこへて

まれとも人〳〵くはなくれ給つかはしきを
よそ浪の心まゝめとゞもうふゆふしられい
禅の御かたより出たるくい従者とめ多く重い
御悟りなるしかりとり出重若やしと浅慮浅
屏風なとあたりくちうそ浮世絵師木下乃
うちひろ月みつゝおさまるをたゝ月待ろふ
てくりふくあまたもひろしれさい上流との村地
もふ此そうふおやうあのことりめわか君いと
しくはなうへいうふ出る年ゆんと梅の見れ給へて
淀すゝ小静なもてをえ多青給等か領てう

とらに禅んとの給ふ静かなとまろくいまいたい栽
よ出りのまゝしきそはりし人まおて給へいとわ
えしくてまれ梅し終つりものをいまちて梅され
と梅しおほしとれたつね松兵おりうり此のまゝに見
まる世いかなくらさ傍の新くらさ満去ろひさ満に乃て
いもすず庭乃とれかゝて玉代のる禅くるも風ま
んてとくしやみらすまえしたれくとひかされ
と出ふかい女をまし淀つてそ淀りふりけられ
海らとかのさいらかり乃とまりふれいおと
こゝらりそ三寸乃ふ小ありふろく人乃もか給

東京大学総合図書館

つりとはかりて人にみえぬ事に人かくしけるにおい
あしとはかくれてうしけれはゆかすと出けれはさま
さいつ日たうて禄ゑ身給ひて人まくら何なる
とはる人さき人て中河あくそいむ人も夜行
ころそれ給ひて魚はいりまとへ人もしまなるゝ手
ちいさき魚かすりいて流るふさ里一ともありぬれと
いとおかしけれとて家人はいうる君は何事よ海
とられたる梅は給つるに任せてありしとなきかく
られおい女をさきらへ人はかまいかりむや
母は宮やたくらかめゑんよ寿命と、いさくりと

亀寿ちやう給はりけるにはかに風患て見えけれは
いみき寿ようにてそあつりしきりてひはたに
りし寿絵あそひ物をもいへりすしきて見せ
寿りはいかりしけれ半とも給やらしく花
出給ふ母ひ亀のふちやかれるらちなとよみて
とうして何心なく此またなかりしてたる行つゝ
いとうつく寿よ我にもらはるまれなく見行きん
うのさはまり給つゝよ立あかく庭の木立
池のさまとのそきて侍へは気枯のすんきゝ給よ
かきのやゝすまおもしろくなくみえてまいれ宮仕

五位の君ませまほしきみ出入給けるにみゆ
きあのかたちおぼえ清げなる唐風ともまたはおはし
君絵成見つゝめでたかりておぼえけるやうにや
君は三月うちつゝさいり給ひて人々をあつめけ
るらし君にて給ゆてはんみておもひはべるや
てかしこまりてゆきくまゝ君給ひて見世させ給
いらへゆかしけれはあつめ給つりむさしのと
ぬいかにてこれぬと紫のゆかりかは給ひてすまふ
君然はとおもひの成にかりて見ん給つりきこ
しちは給へく

孫は言ひと善くそ言ふむ給ひけれは房まけれ
母の弟のゆかりなどありて君のひ給ふとあれは
まろうらいうけさせて見んかまほしつるの御思ひめ
うらけるもいらはてあひてらうて孫ともむ
けよのかれぞもろ文むれ書ひて君おもんうしとの
給へはうらそたまひてか給ふかりき第ゆかりをも
さ海はむつまれ君かゆもらうたかのこまゆきは
いかうもあやしとおもひもなくそこあひ給ふとも給く
そう給ふと世の文見給へは
ここは給ふ君ゆへとまう孫はおかしけるかは給

業平ゆらうらみんといふわか業平とおもひさためみ
えそおもくよめりけり、新つり衣にそ君のみそ
彼のうたの作さらし歎てかんなりて、いとやう
じけひてんと見へ行ひいかれとも待てやすまつ
らけるてはろうよふなひとひきて、こよ鳴さ
抱かれひれまかりきりなりのことよりなし人て
となまり行くるおきこて給ふる中将出む
うけるくそまひありしるまゝに人よまさせ
と源中考ての行いか納言とおふ中年いせうよ
くらかろやうけりてゆ衆て書泆、か納言か

かそくてまちくるとこれに業平にてけるよ宮て
いゆうひあれ松のく衣たまゝ春てりこにくるく
里給のん年といふ給ふしと契りあそりし年中納言
たちなとのいとおもくてうつ世乃あまりの
都色いつふわすこしとひん行しなまいにそ字
由の世から入ても給ふつゝあふりと行くく人々
行のとるし歎ていそくまし川音のとの給て
まうけいて信相乃けとゝ御かて歎きて
給へと預もかくらおもうしうけしけうひなと
意しくあしと思いもいのゝとして君とく

しと忠義にて頼みしに世をまかする海老
はへらせ給ひけるは、たゞひめ君の心ぼそさよ、なり
やすく人まかせあり、ものゝ哀をひきかへ
の事にていらせ給ふこそ、いとゞ心うかりけれ、涙なかしき
御ありさま、ことはりなり、忠義は深くおもひ給ひ
君はわかき君のおんなさけこそうしろめたく候へ、義貞
父にまゐらせけりそ、あさ君をたのみ義貞にて頼みまく
らうる也、去年よりし新田へと義貞は心ふたつの忠義貞
こて頼みすりとらりし人々は、義貞にて新田をもちか
ひ新田にまゐりては、今ひとつて此後此事をとくしう

ひとひまかりて、義貞は御頼みありかたく候まゝ、忠義
まことのひとびと、猶ありけるは御内の一門
そのわたく、なげきとくもりてといふことは
給ひて、ふかくもうしいれ、忠義はかきりなり
給ひしこゝろ、ありのまゝ申けれとも、聞へ義貞すまゝ
なりゆき、志は、忍びけれは、たゞ御沙汰を
そらや何事をか思ふ人々もうちなりにし
の御おんはなれつゝ、出る事をとゞまる事
もそおもひなり、心をしたしまじへかいりま
成り申さは、一向すくなかりし、色々とれ

さゆり梅かえのにほひをしてすましけり
と書いへとはさかうかりけるきくなり
ゆかしくおもしろきたり

B7874

東京大学総合図書館

東京大学総合図書館